



特別講演の講師、幣憲一郎副部長はオンラインで参加

第3回「管理栄養士と開業医がコラボする会」が7月16日、大阪樟蔭女子大学で会場およびハイブリッド形式にて開催された。

同会は、医療法人松若医院の松若良介院長、管理栄養士で大阪樟

大阪樟蔭女子大学など 管理栄養士と開業医がコラボする会

地域での管理栄養士の存在意義について さまざまな視点から検証



管理栄養士と開業医がコラボする会のホームページはこちら

蔭女子大学健康栄養学部健康栄養学科の井尻吉信教授らが発起人を務める会。在宅栄養管理は、地域包括ケアシステム構築における課題の一つで、また、近年の診療報酬改定における栄養関連の見直しもあって、管理栄養士の活躍の幅は広がりつつある。

こうした背景を踏まえて同会では、診療所における栄養食事指導の重要性、経営安定化の観点から、**「かかりつけ管理栄養士の存在意義を周知させることを目的に2019年から活動。管理栄養士と開業医が協働することの重要性を啓発し続けている。」**

第3回目となる今回は、特別講演、一般講演、フリーディスカッションの3部構成で行われ、会場には管理栄養士、医師、歯科医師ら約30人が集まった。

はじめの特別講演では、京都大学医学部附属病院疾患栄養治療部の幣憲一郎副部長がオンラインで登壇。「病院と地域で共有すべき栄養管理情報をシームレスに引き継ぐには！」をテーマに講演した。

幣副部長は、コロナ禍で栄養食事指導の環境が変化している現状を交え、「従来の対面式から、各



フリーディスカッションでは会場・オンライン参加者からも、さまざまな意見が飛び交った

種情報通信機器を用いた栄養食事指導の形を模索する時期にきている。病院から在宅へのシームレスな栄養支援体制を整備するには、ICTの活用がカギとなる」と述べた。

次いで一般講演では、整形外科診療所、歯科診療所にそれぞれ勤務する2人の管理栄養士の実践報告が行われた。

まず、整形外科領域での栄養食事指導実施率は2・5%と極めて低いですが、この診療所でオステオサルコペニアに該当する通院患者へ、管理栄養士が介入し栄養食事指導を実施したところ、測定結果の一部に改善が認められたという。



多くの刺激を受け、笑顔を見せる会場参加者ら
*撮影のため一時的にマスクを外しています

一方、歯科診療所に関しては、在宅患者では外来よりも複数の慢性疾患を有する患者が多いことや、医療的ケア児を支援する小児在宅訪問管理栄養士など、訪問診療での事例が報告された。

フリーディスカッションでは、活発な意見交換が行われ、オンライン参加者(約20人)からも「管理栄養士が栄養業務以外に受付や診療補助などを兼任することで、コミュニケーション力が高まり、患者満足度の向上も期待できる」「内科以外の診療科でも栄養指導の潜在ニーズは高く、診療所の付加価値にもつながる」となどの意見が飛び交い、盛況のうちに閉会した。